

## 平成 25 年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

|   |                   |                        |                          |
|---|-------------------|------------------------|--------------------------|
| 所属  | 京都大学大学院人間・環境学研究科  | 職名                     | 博士後期課程                   |
| 氏名  | 小川 仁 印            | メール<br>アドレス            | h-ogawa@bd6.so-net.ne.jp |
| 研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）  |                   |                        |                          |
| 17 世紀コロンナ家にみられる日本情報獲得ネットワークの解明 —コロンナ文書館新出史料を通して—  |                   |                        |                          |
| 助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）  |                   |                        |                          |
| 第 7 次日本関連史料調査（於コロンナ文書館）   |                   |                        |                          |
| 調査日時 2015 年 1 月 29～2 月 12 日（2 週間）   |                   |                        |                          |
| <p>調査概要 ローマより東に 80km ほど離れたズビアーク（Subiaco）の、そこから更に山奥へ 5km ほど進んだ、深い溪谷と切立った岩山に挟まれた場所に、ベネディクト会サンタ・スコラスティカ（Santa Scolastica）修道院は建っている。調査対象としているコロンナ文書館は、修道院の付属図書館内に併設されている。このような厳しい地理条件のため、ローマから当該修道院への日々の行き来は絶えず困難が伴う。しかしながら修道院より多大なる厚誼を得て、修道院宿坊において最大 2 週間の文献調査を目的とした逗留が特別に許可されている。逗留の際には、早朝 6 時より日に 8 回にわたる聖務日課への出席が義務づけられているため、文書館での調査もまた聖務日課の合間に行わねばならず、修道院では半ば「学僧」として研究に臨むこととなり、私のような一研究者であっても正に「祈り、そして働く」ことが絶えず求められることとなる。</p> <p>上記のような修道士と寝食を共にしながらの文献調査も、2010 年 11 月の第一回目から今回で 7 回目を数えるに至っている。これまでの調査では、16 世紀～17 世紀のコロンナ家の日本との結び付きを示す史料、とりわけコロンナ家当主に宛てられる書翰を中心に渉猟し、天正遣欧使節や慶長遣欧使節関連記述の発見に努めてきた。そして、その過程で得られた調査成果により、ローマ近郊の一有力家系に過ぎないコロンナ家が、日本をはじめとした非ヨーロッパ世界の情報を積極的に入手しようとしていたことを解明してきた。したがって今回は、そのようなコロンナ家が、異文化の情報に関心を抱くに至った過程、及び具体的な接触の形跡を探るべく、史料を渉猟することとした。</p> <p>その結果、1533 年に執筆されたとされる手稿『宇宙論』（<i>Cosmografia</i>）のなかに日本をはじめとした世界各地の緯度や経度といった科学的記述を確認した。前回調査でコロンナ文書館において確認した『異教徒改宗と福音伝道のために赴いた跣足派フランシスコ会神父、及びカルメル会神父間の絆 中国の諸地域、フィリピン諸島、コンゴ国、アンゴラ国、インド諸地域、及びエチオピアにおいて』と併せて考慮すると、コロンナ家があらゆる視点で非ヨーロッパ世界に関心を寄せていた事を窺い知ることができる。今後、コロンナ家の海外情報獲得過程を解き明かす上での極めて重要な史料を得たと言える。</p> <p>これに並び、天正遣欧使節及び慶長遣欧使節と贖宥状との結び付きを示す書翰も 2 通発見。コロンナ家と日本と贖宥状の関係を相対的に考察すべく、コロンナ文書館に収蔵されている贖宥状の全て約 50 通も採取した。我が国において日本と贖宥状との関係を論ずる研究は、現在発展の兆しを見せており、上記書翰に分析を加えていくことで、当該研究分野の発展に大いに貢献できるものと思われる。</p> |                   |                        |                          |
| 助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。）   |                   |                        |                          |
| 発表者氏名<br>（著者・講演者）   | 発表課題名<br>（著書名・演題） | 発表学術誌名<br>（著書発行所・講演学会） | 学術誌発行年月<br>（著書発行年月・講演年月） |
|   |                   |                        |                          |